

知行院便り

発行/宗教法人知行院 東京都世田谷区喜多見 5-19-2 TEL 03-3417-3456 FAX 03-3417-3000



平成二十七年は乙未（きのとひつじ）。群れをなす羊は家族の安泰を示し、いつまでも平和に暮らすことを意味しています。皆様方のご家族も今年一年安泰に、またお幸せにお過ごしいただけますようご祈念申し上げます。

さて、昨年は私にとって人生の大きなターニングポイントとなる一年でした。

四月一日、先代から住職の大役を引き継ぎ、また十月には誕生日を迎え五十歳になり、天に与えられた使命を自覚しなければならぬ年でもありました。

住職就任から約八か月、天命を自覚するというよりも、目の前の事柄に日々追われるばかりで、なかなか思うよう出来なかつたというのが、感想です。気持では、もっと開かれたお寺、みんなが集えるお寺をめざして頑張っているのですが、新しいことにチャレンジするまでには至りませんでした。

この知行院便りが お手元に届くころには完成しているかもしれませんが、開かれたお寺の一環として、本堂に直接車いすで上がることができるスロープを設置、また影向殿の北側階段に、自動昇降機を設置予定です。一昨年、墓地のバリアフリーをめざし、通路の舗装をした結果、多くの方が車いすのままご参拝いただけるようになりましたので、法事や後席にも車いすのままご参加いただけたらと思っています。

ハード面のバリアフリーは順次進めてまいりたいと思いますが、ソフト面でもできる限りバリアフリー、敷居の低いお寺を目指してまいりたいと思いますので、お気づきの点ご意見等ございましたら、遠慮なくお寄せください。

新年あけましておめでとうございます

知行院住職 坂本観泰

住職、大々先達総一和尚の称号を許される

住職は七月十六日〜二十日、葛川息障明王院（滋賀県大津市葛川坊村）にて修行される葛川夏安居（かつらがげあんご）に参籠し、本年二十五回目の参籠を満じた栄により、大々先達総一和尚の称号を許可されました。

そもそも、葛川夏安居とは、比叡山に伝わる回峰行の祖師 相応和尚の故事に習って、一週間明王院に籠り、昼夜に修行するもので、比叡山で百日回峰を志す行者は修行の総仕上げとして、必ず参籠する習わしになっているものです。

住職は平成元年に初百日の回峰行を満じ、続けて葛川明王院に入寺参



行者の先頭を行く住職

籠、以来二十五度、あしかけ二十六年参籠し、今回最高位である 総一和尚の称号を名乗ることを許可されました。

大々先達総一和尚は、その年の夏安居の総括で、修行に関わる一切を取り仕切る役目と後進の指導者の役目を負うものです。今後は、参籠はせず違う形で行門に関わりながら、後進の育成、行門の発展に寄与していく予定だそうです。



朱のつゆ紐を許されて、東京の後輩行者さんと



お滝参りの先達をする住職

住職のおはなし はんげさ 半袈裟

昨年、檀信徒の皆さまには、住職就任のご挨拶に半袈裟をお贈りさせていただきましたが、その後、彼岸や施餓鬼の法要、あるいは年忌法要に、半袈裟をかけて、参加される方が多く、うれしく思っています。

半袈裟は、僧侶が着ている衣である袈裟の一種です。

袈裟は、そもそもお釈迦さまが仏教を説いた二六百年前のインドで、仏さまの弟子と他の宗教の修行者を見分けるために定められた衣であり、いわば仏教徒の証でした。また袈裟には、心身を清浄に保つ力があるとされ、儀式に臨む際には必ず身につけるものとされてきました。その袈裟が、仏教とともに、中国、日本と渡って、現在も僧侶が身につける衣として使われているのです。

皆さまにお贈りした半袈裟は、この袈裟を略式にしたもので、檀信徒の皆さまが仏教徒として身につけるものです。

半袈裟は、年忌法要に出席する時、彼岸や施餓鬼などの行事に参加する時、あるいは、ご自宅の仏壇でお経をあげる時などに、身につけてください。洋服の上から首にかけるだけで、自ずと心安らくなっていくはずです。

特に家長の方には、今後、寺の行事に出席する時などに、この半袈裟を身につけていただければと思います。それによって、仏さまもお喜びになりますし、必ずや御利益も深まっていくと思います。

また、京都や奈良などに行つて、お寺にお参りする時などにも、半袈裟をかけて合掌することで、いつそう気が引き締まると思います。

仏教徒として、心安らかに生きていくためにも、ぜひ、半袈裟を普段から使うようにしていただければ幸いです。



昨年四月、知行院住職が交代し、坂本観泰住職が就任したのを機に、寺報『知行院便り』を復活させていただきました。その中で、新住職の人となりを知っていただきたく、インタビューを掲載させていただいています。前号では、新住職の僧侶としての師匠である祖父（知行院の先々代住職）の思い出についてお話しいただきました。

今回は、新住職が、天台宗総本山である比叡山延暦寺で修行した時の師匠である即真尊龍師についてお話しいただきました。

（聞き手 編集担当 薄井秀夫）

聞き手 ご住職には、お祖父さまの他に、もう一人、師匠がいらつしやるということですが…。
住職 そうです。比叡山延暦寺で修行をする時に師匠になつていただいた方が、即真尊龍先生という方です。

もともとは先代住職である父が若い頃、天台宗の仏教青年会で活動していて、その時の青年会の中心的な存在だったのが即真先生なんです。先代住職とはとても親交が深く、比叡山に仕事で行くとき等、坂本にある即真先生のお宅に泊まつたり、逆に即真先生が東京に来る時に、うち（知行院）に泊まつたりしていただいたのです。

そうした関係で、私が比叡山で修行をするようになった時、師匠になつていただいたのです。それまで私の師匠は、祖父である先々代住職でしたが、転師の申請を出して、即真先生に師匠になつていただいたのです。

聞き手 即真先生というのは、どんな方だったのですか？

住職 法儀音用、またご詠歌の大家で、とても厳しい人でした。法儀に関してはもちろん、お坊さんとしての立ち振る舞いまで、よく怒られましたよ。

自分では、ちゃんとやっているつもりなんだけど、即真先生から見ると、手を抜いているように見えるらしいんですね。「そうじゃないやろ」と良く言われましたね。

ただ、細かい話をして怒られるわけじゃないので、自分のどこが駄目なのがわからないですよ。それは「自分で考えろ」と言うことだったんですね。いつも、宿題を課せられているようなものでしたね。

聞き手 それは難しい宿題ですね。

住職 私は、先生のカバン持ちとしてしばらくおそばについていたのですが、個人的に用事を頼まれて、解らないことがあると、すぐに先生に聞きに行っていました。そうすると、かなり丁寧にそれこそ一から百まで教えてくれました。厳しい人なんだけど、頼られるのは嬉しかったみたいでしたね。

聞き手 いろいろと教わつたのですか。

住職 先生は六年前（平成二十年）にお亡くなりになりましたが、結局、一度も褒められたことはなかったです。ずっと先生に褒められたいと思つていたのですけどね。

聞き手 六年前にお亡くなりになったのですか。

住職 四月に大学の仏教会の集まりで奈良に出かけたので、報告も兼ねて、先生のお墓参りに行こうと思つていました。行きの新幹線の中で何気なしに、アイパッドで映画を見ていたので、『空海』という映画を。そしたら、びっくりしたんですけど、即真先生が出演していたんですね。声でわかりました。お姿も一瞬出ていなくなつたですね。何か自分に言つてくれていたような気がして。

きつと今の私を見て、「もうちょっとしやんとせい」と言いたかつたのかもしれないですね。（続く）

終活のススメ

親類を法事に誘うということ

宗教ジャーナリスト 薄井秀夫

最近、法事に呼ばれることが、めつきり少なくなりました。

この間も叔父の七回忌があつたことを、半年くらい過ぎてから知り、さびしい思いをしたものです。ひと声かけてくれればいいのに、と思つたのですが、あちらはあちらなりに気を使つてくれたようです。ただ、気を使つてくれてるのは解るのですが、ちよつと淋しくも思いました。私が大人になつてからは、会うことも少なくなつていきましたが、子どもの時にはよく遊んでくれた叔父なので、そうした機会があつたら、ぜひ手をあわせたいですし、思い出話もしたいのと思つています。

法事に呼ばれなかった、ということとは、皆さんも経験したことがあるんじゃないかと思つています。私も、呼ばれなかったのは、この時だけじゃありません。これまでに何回か、気付いたら、法事があつたらしいということがありました。あまり気にしない人もいるかもしれませんが、私は、どうしても気になつてしまいます。不謹慎かも知れませんが、私には、法事が楽しみという気持ちもあるのです。

法事は、故人が「あの世で幸せにくらせるように」と供養するために行うものですが、決してそれだけではありません。

人は亡くなつても、その人と私たちの関係はなくなることはありません。手をあわせると、自然と故人の顔や思い出が浮かぶはずなんです。法事に出席して手をあわせることは、故人との絆を再確認し、これまで以上に深めていくこともあるのです。

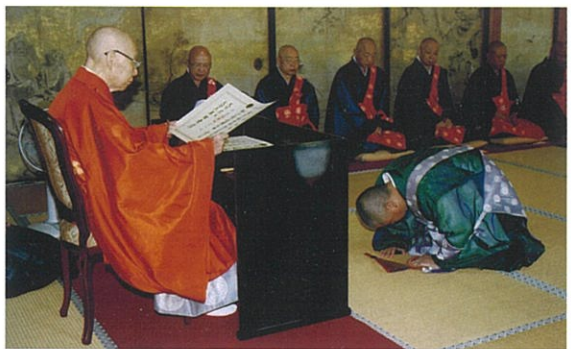
それに故人を中心として、親戚が集まるということも大切なことです。特に最近では、親戚付き合いが少なくなる傾向にあり、なかなか一族が集まる機会がありません。だからからこそ、法事くらいはちゃんとやって、親類の絆を深めていったほうがいいのじゃないかと思うのです。

それから法事には、子ども達も連れて行くことも大切だと思つています。最近では子どもも塾や習い事で忙しいと思つますが、これから大人に育つていく中で、先祖や親類との絆から得る学びは何ものにも代えられない重みがあります。

この点は、お葬式も同じです。家族、親類、友人知人がそれぞれ、故人を供養し、故人との絆を噛みしめるために行うものです。最近流行りの家族葬は、こうしたお葬式本来の役割を果たすことができません。家族だけで最後の時間を過ごしたいという気持ちもわからなくもないですが、友人知人も手をあわせてお別れをしたいのです。

法事に誘つると、相手に負担をかけると思つてしまうのは、わからなくありません。ただ迷惑をかけること、迷惑をかけられることで、深まる絆もあります。こんな時代だからこそ、法事を通して、親類との絆、先祖との絆を深めていきたいものです。

住職任命辞令を親授される



住職は、八月二十六日、滋賀院門跡（滋賀県大津市坂本）にて執行された平成二十六年度第二期住職任命親授式に夫人と共に出席し、知行院

第二十八世住職の辞令を拝受しました。親授式は、滋賀院門跡お内仏にて天台座主半田孝淳親下お導師のもと、法業（勤行）から始まり、梅の間にて出席した新住職一人一人に天台座主親下より住職辞令が親授されました。

その後、天台座主親下よりお言葉をまたご臨席頂いた、天台宗・延暦寺両内局を代表し天台宗務総長、延暦寺執行からそれぞれご挨拶を頂きました。

坂本住職は、出席者を代表して座主親下の御前にて謝辞を申し上げる大役を仰せつかり、寺門興隆、檀信徒教化により一層邁進すると誓われました。